

令和元年度 あしたのまち・くらしづくり活動賞 主催者賞受賞

地域で親子が共に学ぶ《体験的環境学習》

東京都町田市 つくし野ビオトーププロジェクト

「生きぬく」「暮らしていく」「食べる」とは？

「生きぬく」「暮らしていく」「食べる」……という、極めて人として根本的に持っているはずの力が、近年の子供たちは弱くなっているのではないか？ 従来は、地域社会が子供たち（若い親も）の成長を見守り、育てる役割を担っていたのだが、次第にその力が弱まっているのではないか？ ……そんな「疑問」が、この活動の根本にある。

誰もが、豊かで幸せな人生を全うしたい……その根源となる人としての基礎的世界観・自己肯定感を得るためには、年少期に親や兄弟たちと経験する自然体験が重要ではないか？ その有無が長じた後の人生に大きく影響するのではないか？ ……そんな「想い」が、この活動の根底にある。

環境NPO（任意団体）「つくし野ビオトーププロジェクト」の設立の背景

日本全体は豊かな自然環境に恵まれた国である。しかし、日本の人口の過半は現在、大都市とその近郊に居住している。このような場所を生を受けた子供たちは、人間として成長するのに極めて重要な、基本的な身近な自然や地域、生き物とのふれあいの実体験を得る機会に恵まれているとは言い難い。これに起因して問題行動や適応障害を起こす児童すらいる。

本活動は、このような状況を憂いた町田市立つくし野小学校4代前の田村健治校長（故人）が14年前の在任時、自然体験や生物とのふれあいを通じて、様々な命の大切さ、環境学習の大切さ、身近な地域の自然について体験的活動を通じて学ぶ機会を児童に提供することを目的に

始めたものである。

本活動は、田村先生の理念を基盤とし、地域住民が主催を引き継ぎ、発展してきた環境NPO団体が実施する、「地域住民による都市近郊型体験的環境教育・学習」となり、現在に至っている。

当団体が、活動の拠点とする町田市つくし野地区は、東京都町田市南端に位置し、横浜市に隣接した地区である。学区のほとんどは、約50年前電鉄会社によって計画的に開発されたエリアであり都市インフラは整っているが、多摩地区特有の里山的景観はほとんど残されていない。しかし隣接した横浜市エリアには、このような開発を免れた里山的自然景観が数多く残り、里山とのかかわりのある暮らしが垣間見えるところもある。

豊かな自然環境がある地域での体験的環境学





毎回活動後、集合写真を撮るのがお約束。5月の活動で植え終えたサツマイモの苗を前にパチリ！

習は、ある意味容易かもしれない。しかし、日本の人口の過半は私たちのような環境に住み、子供たちはこのような環境で育っている。それ故、このような地区に住む「子供たち」(でも)人生の基盤となる世界観や人生観を築く基礎となる、獨創性に富んだ「自然体験」ができるような本活動の活動プログラム、13年間の経験や実績は、必ずや他の多くの類似地区に対する普遍性があると考えている。

また、現代の子供たちは、単に自然体験だけではなく、環境・生命・再生可能エネルギーなどを体験的に学んでいかななくては、これから先、彼らの時代を生きていく心の糧を得ることはできないと考える。

当活動は、小学校主催の活動ではない。当時の小学校長が地域に呼びかけて始まった活動だが、現在は地域住民と保護者が連携した自主的体験的学習となっている。地域の寺や地主の提供による畑での作物栽培体験や、地域住民(農家)から、農業指導を受ける等、地元密着型活動であることも特徴である。当活動は、基本的に参加費を徴収しない。無償で高いレベルの環境学習活動を長く継続的に提供している点にも大きな特徴がある。

活動2年目(2006年)から、活動内容を紹介するブログを開設。毎回の活動案内、活動報告、活動アンケート結果のみならず、季節の身の回りの動植物とのかかわりなどのニュースを毎回の活動案内・報告のみならず、環境系の話題を積極的に発信継続。活動紹介の映像などは、すでに膨大な量に及ぶ。(→<http://biotop-project.blogspot.com>) 月間のアクセス数は2000~3000ほどで安定している。総閲覧数は約15万PV。

活動プログラムは校内のビオトープ整備に始まった。しかし小学校は公共施設であり、校長が変わる度に判断が変わり、継続的な整備には限界がある。そこで子供たちが幼稚園や小学校

の授業や行事、地域や家族単位での活動では学び・体験することのできない体験的環境学習を提供し、経験することができるよう、ある時期から活動拠点を学校から近隣に飛び出し、活動目的・内容を発展させてきた。

活動開始の初期から、年間活動計画を組んで実施し、1年間で人としてひと通りの基本的な自然体験を経験できるように配慮して構成し、実行している。

現在は、年間体験・学習テーマの設定や年間継続プログラム(畑での植え付け↓世話↓収穫↓調理)および数年に及ぶ継続したプログラムの実施(「植物つてすこい」シリーズ、「森で遊ぼう!森で学ぼう!」シリーズ、「川で遊ぼう!川で学ぼう!」シリーズなど)による内容の高度化を志向している。

世代間交流と地域内新旧住民の交流の実現も目的の一つ。

「つくし野ビオトーププロジェクト」の特徴

14年前、当時の小学校長が主催者として始めた活動を、地域住民が引継ぎ、現在は任意団体として、地域住民と保護者が活動を主催。小学校と同小PTAとの連携の中で、地主など地域住民や寺から畑用地を無償提供していただくなどして、地域ぐるみの活動へと変化している。活動が、単なるあそびにならないように配慮。

「体験的環境学習」を志向。毎回の活動前半には、当日のプログラムの環境学習的ねらいを、わかりやすい言葉で説明。10問3択クイズの方法などを用い、児童があきずに興味深く活動に加われるように配慮。家族連れで来る未就学児むけプログラム・教材も用意する場合もある。

体験活動では、年齢や性別により、自分に合った内容を選択できるように配慮。

「畑で作物を植え、育て、収穫し、食べる！」の一連の畑でのシリーズの活動を次第に重視し、充実させている。畑は農薬の用い方を適正に行えば、生物相が豊かなビオトープとなり、生き物とのかかわり、食育などの面で、豊かな経験を子供たちにもたらしてくれる。年間を通じて、定例と不定期の特別活動を合わせれば、全体の2/3のプログラムを占めるまで、畑のプログラムを増やしている。

野菜を嫌いな子がいる。しかし、自分で収穫した野菜は不思議と目を輝かせて食べる。虫食いの穴の開いた葉物野菜は食べないという父親がいる。しかし、完全無農薬で育てるとこういう野菜ができると、実物を見せると、考え込んでしまう。「命」は他者の命を奪う「食べる」という行為によって、初めて成り立つことはなかなか日常の生活では認識しにくい。しかし、畑で自らの手で、野菜を育て、家族で話題しながら食べる行為を通じて、家族のきずなはより深まり、家族の命は「食べる」ことで維持され、命がつながっていくことを実感できる。

「森であそぼう！森で学ぼう！」の活動では、1本プランコ、ドコデモプランコ、ハンモックなどのアトラクション系活動と、藍の生葉タタキ染め、小枝で小物作りなどの工作系、森のジグソーパズル、森の音さがしビンゴなどのゲーム系、昆虫採集…といった多種のプログラムを用意し、複数から選択をさせている。

「たきびをしよう！火を学ぼう！」の活動では、最近ほとんどなされない、児童だけでは火の準備、着火、調理の体験を実施。たき火料理でも、家族単位ではできない規模・内容を志向し、竹で作るバームクーヘン、大丸太のウッドキャンドル、カボチャの丸焼きといった、



活動の前に、そのプログラムの内容や目的などを写真や実物で説明

ダイナミックで印象に残る体験プログラムを実施。特に震災後は、震災にあった時、子供だけで火を起こし協力し、食べるものと暖を得る経験をすることも人気プログラムの一つとなった。たき火メニューは20種を数える。

「水を学ぼう！川で遊ぼう！」の回では、初めに生き物にとっての水環境の重要性を話した後、近年ほとんど行われない川遊びや魚とりの様々な方法を伝授。

この活動の代表者および顧問、支援保護者は、元々は環境学習の専門家でも、教育関係者でもない。代表者は専門性の獲得が必要と考え、この活動を始めた後、環境系の専門的学習を重ね、従来持っていた1級建築士などの建築系資格に加え、1級・2級ビオトープ計画管理士、1級ビオトープ施工管理士、環境省認定・環境カウンセラー（事業者部門・市民部門）の公的資格の合格、登録を果たし、客観的に高度な環境学習のレベルがあることの評価を確認している。

当活動はすでに14年目の歴史を持つ。参加者の属性もつくし野小学校から、つくし野天使幼稚園、さらには近隣の3・5の小学校、3・4の幼稚園・保育園に広がっている。現在は年間の延べ参加者数は900〜1000名（子供と親と主催者の合計数）。13・5年間の延べ開催回数約180回以上。延べ参加人数1万1000名以上の開催実績となっている。

つくし野ビオトーププロジェクト

代表 小池常雄